「国語科におけるアクティブ・ラーニングの視点による授業改善について」

愛知県立小牧南高等学校　教諭　青ちづる

1　はじめに

本校の国語科では、平成二十八年度から平成三十年度までの期間で、愛知県教育委員会が実施する県立高等学校教育課題研究指定校事業の研究指定校としてアクティブ・ラーニングを導入した授業改善を進めている。現在、県内の研究先進校の実践に学ぶと同時に、大学等の学識経験者の指導のもと、適切なパフォーマンス課題やルーブリックを開発すべく研究を重ねている。今回は、研究初年度の途中経過ということで、いくつかの授業実践例を報告したい。

2　研究目標と研究体制

（1）研究目標は以下の通り。

・国語科において、アクティブ・ラーニングを導入するに当たり、各評価の観点に対応したパフォーマンス課題及びルーブリックを開発し、パフォーマンス評価を各教材の一連の指導の中で、有効に行う方策を研究する。
・「思考力・判断力・表現力」を磨くことを目標とし、言語活動を充実させるために、メディアリテラシーを養うための授業方法を確立する。
・グループ単位の活動を通して、対話的、主体的な学びの機会を創出し、自己評価や、相互評価をより確かに行えるようにする。
・年度を追って他教科が加わることで、国語科の学びの汎用性を高める研究とする。

目標の設定に当たっては、県内で行われてきた先行研究の研究目標を参考とし、過去の研究を継承するような形で本校の研究が推進できるように留意した。

（2）研究体制

研究を進めるに当たって、次のような研究体制をとることとした。

【校内研究会議】（一年目）
校長（研究総括）、教頭（校内研究委員会運営）、教務主任（校内研究委員会事務総括）、国語科主任（研究主務者）、教務部、国語科
※2年目には、地歴・公民科、3年目には数学科が加わる予定である。

【研究支援体制】
・名古屋大学（本校学校評議員、柴田好章教授）、中京大学（酒井敏教授）からの助言。
・高等学校教育課、総合教育センター（教育研究サポートデスク）による支援。
・本校教科主任連絡会を通した他教科への普及。

【研究検討会議】
・校内研究委員会に大学の有識者、県事務局が加わり実施。

3　授業実践例

（1）第2学年現代文B
「マイクロディベートの形式で『山月記』を考察しよう」

『山月記』のまとめとして、李徴が変身するものが虎である必然性についてマイクロディベートの形式で考察させた。本文の記述を根拠として挙げながら主張することに留意させた。発表のためのワークシートを用意し、答え方の定型も示していたため、とまどうことなく発表できたが、ワークシートを読みあげるだけというような発表も多く見られたため、その点を改善する方策が必要であると感じた。

マイクロディベートの様子

（2）第2学年現代文B
「意見文を書く」

相模原の障害者殺人事件について毎日のようにさまざまな視点から考察した新聞記事が載っている時期であった。そこで、「犯人の主張である『障害者は社会のお荷物だ』という考え方について説得力のある反論をする」というテーマで意見文を書かせた。意見自体は、その考え方への反論と決まっているため、いかに説得力のある説明ができるかという点を重視した。書かせる前に、「社会のお荷物」の意味するところと、その考え方の問題点についてグループで話し合わせた。テーマがタイムリーであり、活発な意見交換がなされていた。以前の授業で、まず個人で書かせてからグループで意見交換をさせたことがあったが、あまり意見の深まりが見られなかった。今回のように他の生徒の意見も借りながら自分の意見を固めていく方が生徒の実情に合っているということがわかった。まとめとして、グループ内で優秀意見文を選ばせたが、回収後の教師の評価とは大きく異なるものもあり、「評価する力」をつけさせることの必要性を強く感じた。

グループ内で意見文を交換

（3）第2学年古典B
「『大鏡』を脚本化して演じてみよう」

『大鏡』「南院の競射」の場面を脚本化して演じることにより、登場人物の人物像に迫るという試みである。研究先進校日進西高校の実践例をベースに、少し変更を加えて実践した。先に一斉授業で口語訳を確認してから脚本化する方がスムーズにいくとは思うが、今回は実験的な試みとして、教師は、口語訳や説明は一切せず、脚本化するためのワークシートとわずかな道具を用意するだけで、まずは、すべて生徒に自由にやらせてみた。インターネットで口語訳を調べることは禁止とし、間違ってもいいから自分たちの力で訳すよう指導した。

準備のための3時間は、どのグループも活発に意見交換し、演じる生徒、小道具を作る生徒、演出をする生徒等に分かれて楽しそうに準備をしていた。何とか自分たちの力で進めようとしており、教師の力を借りに来る場面は全くなかった。観察していると、初めのうちは、集中できずに活動に入りきれない生徒も見える。つい、きちんとやるように声をかけたくなるが、今回は観察者に徹した。そのような生徒も、活動していくうちにのめり込んでいき、準備の3時間目は、どのグループも練習に熱が入っていた。本番の劇では、全然違う話になっていたり、人物関係が正しく把握できていなかったりというグループもあったが、主題となる道長の剛胆さについては正しくとらえられているグループが多かった。最も評価の高い脚本を演じたグループは、演技をする生徒の後ろに心情をつぶやく生徒がついて進行していた。また、脚本化のまとめとして、他のグループの演技を見ながら自分の脚本に違いや疑問点を書き込ませ、それをパフォーマンス課題として提出させた。次の時間に、教師から内容や時代背景について説明し、自分たちの脚本を振り返らせた。

なお、後日、この試みについてアンケート調査を実施した。「この授業は楽しかったか」という質問に対しては、「とても楽しい」「まあまあ楽しい」と回答した生徒が98％であり、「この授業を通して本文の内容はよく理解できたか」という質問に対しては、「とてもよくわかった」「まあまあわかった」と回答した生徒が96％であった。しかし、普段の一斉授業と比較した項の場合、「一斉授業より楽しかったか」という質問に対しては、「一斉授業より楽しい」が53％、「どちらも同じ」が44％であり、「一斉授業よりもよくわかったか」という質問に対しては、「一斉授業よりよくわかる」が42％、「どちらも同じ」が38％、「一斉授業の方がよくわかる」が20％であった。今後も、楽しいだけに終わらず、深く学び理解できる授業の実践を目指すことが必要である。

「大鏡」を脚本化し実演する生徒たち

また、アンケートには、「生徒同士の方がわからない点について質問しやすい」「グループで考えて演じたことによって内容が頭に残りやすい」という回答が多く見られた。今後も授業の中でこの長所を活かせるよう考えていきたい。

（4）第2学年現代文B

「文章の主題について主体的・協働的に理解を深めよう」

「『内的成長』社会へ」のまとめとして、教材の中で述べられていた「中間社会の凋落」について、自分たちに身近な問題としてとらえ、考察させるという目的で授業を行った。まず、グループごとに、「中間社会の凋落」に関する壁新聞を作らせた。実際の新聞記事から主題に合う記事を選ばせ、複数の記事を一つにまとめさせた。その際、選んだ記事が「中間社会の凋落」というテーマに合っているかをグループ内で確認しながらまとめるよう指導した。壁新聞が完成したら、自分たちがまとめた具体的な問題に対する解決策を考えさせた。最終的には、グループを一つの政党とし、立ち会い演説会で壁新聞を示しながら問題点と解決策(政策)を発表するという授業を行った。立ち会い演説会では、各グループ(政党)とも時間内で発表でき、進行係の生徒達の力もあって、スムーズに進行し最後の投票まで行うことが出来た。ただ、壁新聞の内容が主題とずれていたり、発表方法に工夫がなかったりという問題点があり、事後指導の必要性を感じた。授業を参観くださった先生方からも、「壁新聞の見せ方に工夫が必要である」「演説会で終わるのではなく、他の政党との討論などを採り入れて発表内容を全体で共有してはどうか」「最後にもう一度教科書本文に戻した方が良い」などのご指導をいただけたので、今後改善していきたい。特に、「やりっぱなし」にならないことの重要性を教えていただき、感謝している。

テーマに合う記事を選ぶ

なお、この授業内容については、十月二十八日（金）の第六限の授業を公開授業とした。当日は、公開研究授業に引き続き、名古屋大学教育発達科学研究科の柴田好章教授(本校学校評議員)による講演「アクティブラーニングにおける深い学び」を本校の現職研修会を兼ねて行い、その後、研究授業の反省会を行った。中京大学の酒井敏先生、県教育委員会、県総合教育センター、このたびの研究指定に加わる本校以外の三校の方々から多くの貴重な助言をいただいた。当日の授業に関する意見の概要は次のとおりである。

・似た政策を発表した政党があったが、当選結果は異なった。その理由を議論したり、代表質問をしたりと、次時で深めたい。
・班として投票する一票がそれで良いのか、話し合いの型を決めて、班で話し合いさせたかった。
・聞きながらメモを取ると、書くことに集中して聞き手は下を向く。そのことによって発表者も原稿を見てしまうので、聞く時は聞いてからメモを書くと良い。
・筆者の意見と自分たちの意見は同じか異なるかを意識させたい。出た意見を作品に戻すことが必要。より深く考えることで読みを深めるねらいがあるなら作品に戻らなければならない。上手に伝える力を伸ばすねらいならば振り返りシートの工夫が大切。ねらいはシンプルにしたい。今回は内容理解よりも、伝える方に傾いてしまった。
・壁新聞は皆が見えないと分かりにくい。教室後ろに貼って、後で見に行ったのは良かった。実物投影機や画像で取り込んで映す方法もある。

各「政党」からの発表

活発な意見が出た授業反省会

授業自体はスムーズに進行させることができたが、それは生徒の力に負うところが大きく、教師としては反省点も多くあった。授業反省会で出た意見を参考にするとともに、考えを深める時間をさらに設けるならば、学習したことが生きて身につくのではないかと考えている。アクティブ・ラーニング

では振り返りが欠かせないため、今後もその方法を研究していきたい。
なお、本授業の単元案、授業案については、最後の[参考資料]に示した。

（5）第2学年古典B
「短歌道場に挑戦しよう」

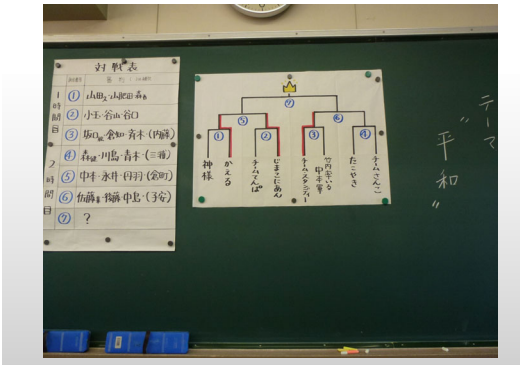
一年次に短歌の鑑賞を行い、二年一学期に短歌の創作を行った。それを踏まえて今回は「短歌道場」というやり方でTT形態の授業を行った。「短歌道場」とは、歌合せを二人一組で計五組が対戦する相互批評の形式である。試合ルールは次の通り。

・5人で1グループを構成し、チームの対抗戦を行う。
・1対1の対戦を、先鋒戦、次鋒戦、中堅戦、副将戦、大将戦の計5回行う。
・試合開始前に先鋒戦の先攻と後攻をじゃんけんで決める。
・先攻、後攻はそれぞれの対戦で交互となる。
※Aチーム対BチームでAが先攻の場合は、
先鋒戦　先攻Aチーム、後攻Bチーム
次鋒戦　先攻Bチーム、後攻Aチーム
中堅戦　先攻Aチーム、後攻Bチーム
副将戦　先攻Bチーム、後攻Aチーム
大将戦　先攻Aチーム、後攻Bチーム

先鋒戦を例にとり、さらに詳しく説明すると、次のような流れである。

①Aチーム：短歌の披講と解説（30秒）
②Bチーム：質問や意見
③Aチーム：応答（②と③合わせて1分）
④Bチーム：短歌の披講と解説（30秒）
⑤Aチーム：質問や意見
⑥Bチーム：応答（⑤と⑥合わせて1分）

合計3分が必要となる。審判は三名で次ページのような審査用紙（評価用ルーブリック）を用いて判定をした。この短歌道場形式は、岐阜県郡上市において小中学校を始め、高校生や大学生に参加してもらう一種の短歌大会として形式を整えてきたものであり、今回初めて授業に導入したが、50分という時間ではトーナメント形式で決勝まで行うのは時間的に苦しいことや、使用した評価用ルーブリックの項目を短時間で評価するのが難しく、精選する必要があることが分かった。「評価用ルーブリック」を次に示す。



「平和」の題と対戦表

判定	5	3	1
作品の内容	独自の着想をしている	作者なりの発見がある	既成の作品の範囲である
作品の調べ	調べが整っている	短歌形式を踏まえている	ぎこちない調べである
自作説明	自作の魅力を伝えている	自作について説明している	自作の内容を説明しきれなかった
質問への応答	質問内容に対して明確に応答している	質問内容を理解している。	質問内容に答えられていない
発表態度	印象が鮮明で自信をもっていた	時間内に発表をした	時間を守れなかったり、言いよどんだりした
テーマ詠	テーマをよく作品に活かしている	テーマを踏まえて作っている	テーマから逸脱している

表の中の空欄に〇を付ける形で、三人の審判が判定を行った。決勝まで進んだ実際の作品も示しておく。

涙と血埋もれた兵士白朝日咲かした平和枯らせない
夕暮れの空を彩るグラデーションさえぎる影を私は知らない

右方は男子、左方は女子である。この対戦では、左方が勝ちであった。左方の作品は、決勝に出る前は、「夕暮れの空を彩るグラデーション人は変われどあせることなし」であったものを、下句を見せ消ちにして提示していた。このように、少しずつ作品を改善していったり、自作に対する解説に磨きをかけていく作業にもこの短歌道場形式の魅力があると言えよう。この対決では、左方は、「白朝日」とはどのようなものか、右方は、なぜ「私」なのか、「我ら」ではだめなのかという趣旨の質問をしていた。最後に、授業を終えた生徒に実施したアンケートの概要を記しておく。

決勝の場面

○授業の進め方について
毎回は大変だが、大変楽しかった。／皆の意見が聞けるのがよい。
時間があればもっと積極的にできる。／個人戦も欲しかった。
自分が前で発表するとなったらおそろしいと思う。
○よりよい進行方法はあるか
５人制のジャッジがよい。／グループで話し合いたい。
劇のように進めてもよい。／決勝戦のほうも5対5にして欲しかった。
○審判をしてみて
難しい。／迷う場合がある。／友人の点は付けにくい
短歌を今までとは違う観点から見られ、短歌の良さを発見できた。
判定を発表者から見られないようにして欲しい
○その他
クラスメートの文学的な才能を見られる。／皆のレベルが高い。
／自己過大評価が分かった。／自分では思いつかない視点が興味深い。
個性が出ると思った。／相手への質問内容がよい。
審判が回ってこないのが残念だった。／古語を使っている子がすごい。

4　公開研究授業

一月二十一日(火)、県立高等学校教育課題研究指定校事業初年度の成果発表として、公開授業を実施した。県内の中学・高校の先生方に加え、名古屋大学を訪れているモンゴル授業研究学会の先生方15名も参加され、総勢50名を越える参加者となった。５時間目に小塩卓哉校長による「アクティブ・ラーニングよって何が変わるか」と題する講話が行われた。６時間目は、今回のメインとなる池山朋花教諭による「鴻門之会」を教材としたアクティブ・ラーニングによる授業が実施された。この授業は、生徒達が漢文で書かれた『史記』の一節から、登場人物の心情を読み取り、それをもとに自らシナリオを作成して演じるというものである。グループ毎に自分たちで作り上げた劇を生徒たちは演じていた。授業者としての工夫の一つとしては、劇を上演後、記者会見方式で登場人物の心境をたずねるという試みも行っている。７時間目は、パネルディスカッション形式で授業研究会が行われた。名古屋大学の柴田好章教授、県高等学校教育課及び総合教育センターの指導主事及び室長の先生方、県内の校長先生方から示唆に富むたくさんのアドバイスを頂くことができた。
授業反省会で出た意見を集約しておく。

剣舞のシーン

○授業形態について
・教員の声がほとんどないことが、アクティブ・ラーニングの仕掛けである。
・司会も生徒が行うことで、やわらかな雰囲気が生まれ、恥ずかしがる生徒も発言できる。
・枠をあまり当てはめず、フリーの部分を与えて、うまくコントロールする。そのためには、しっかりとした教材研究が必要。
・活動から学びへつなげる。例えば他班を　評価する際、「５」を付けるのであれば　その根拠まで結び付けていないのが残念　だった。

・生徒が活動に馴れてくると、かける時間ももっと短くできる。

○記者会見について

・本文に書いていないことを質問し、生徒が答えることで、読みが深まる。気づいていない生徒が気づく機会にもなる。

・自分はこのように読んだ、というものがあるからこそ、自分との比較ができ、分からないところを質問する。２つの班が発表したことで比較もできる。

・記者会見の質問が優しかった。「本当にそうですか？」が言える生徒がいると、学びの深さが出てくる。

○その他

・アクティブ・ラーニングによって教員の負担が大きいのはいけない。持続可能にする。授業案をそのまま共有していっても良い。

授業を行った池山は、記者会見の場面も平凡になるかと危惧していたが、教員が思いつかないような質問をしたことに驚いていた。生徒が生き生きとした姿を見せたことは良かったが、国語科としての学びという点では、どこまで目標に迫れたのかは、検証がいると考えており、脚本化の本来の目的をどこまで生徒が意識して活動できたのかについて、今後研究していく予定である。

この授業の後に生徒に書かせた「振り返りシート」から、今回の授業に関して、メリット・デメリットの面から感想を拾っておく。

〈メリット〉

・皆で心情を考える時は、一人ひとりが意見を出していてすごく良い雰囲気だった。

・最初は全然グループに貢献できなかったけれど、役で貢献できてよかった。

記者会見の質問を協議する生徒たち

・劇をするためにいつもの授業以外で本文を読んだので、内容をちゃんと考えることができ、登場人物の心情を考えることができた。

〈デメリット〉

・もっと資料を読んで心情を理解したほうがよかった。

・脚本づくりの際に、自分たちの考えを組み込んでしまった部分があったので、もう少し深い所まで調べるべきだと思った。

・勝手に人物像を膨らませてしまうので、国語は難しいと思った。

5　その他の授業実践（青・池山実施分）

科目名	単元・教材	生徒の活動
現代文Ｂ	「山月記」研究 『山月記』	一人称の変化、漢字の使い分け、月、虎への変身などの設定について、作者の意図を考察する。グループで各課題を研究し、発表する。
現代文Ｂ	「こころ」研究 『こころ』	「先生」の遺書からわかるＫの自殺の原因について、文章から根拠を探し考察する。ペアで研究し、発表する。
古典Ｂ	語の識別 さまざまな古文	文法の識別問題について、個人→グループ→個人という流れで識別法を確認する。
古典Ｂ	敬語の理解 『枕草子』 『大鏡』	教師の説明を聞いたあと、グループごとに教え合いながら問題を解き、確認テストで全員合格を目指す。
古典Ｂ	主題をとらえる 『更級日記』	グループで話し合いながら、文章の大まかな内容を確認し、主題をとらえる。

［参考資料］

国語科（現代文Ｂ）学習指導案

指導者　青　ちづる

一　日　時　平成二十八年十月二十八日（金）　第六限

二　学　級　第二学年八組（男子　三十四名　女子　六名）・理系クラス

三　場　所　視聴覚教室

四　単　元　文章の主題について主体的・協働的に理解を深めよう。

五　単元の目標

（1）　文章を読んで、構成、展開、要旨などを的確にとらえ、その論理性を評価すること。（「指導事項」のア）

（2）　目的や課題に応じて、収集した様々な情報を分析、整理して資料を作成し、自分の考えを効果的に表現すること。（「指導事項」のエ）

六　取り上げる言語活動と教材

（1）　文章を読んで関心をもった事柄などについて課題を設定し、資料を調べ、その成果をまとめて発表すること。（「言語活動例」のエ）

（2）　教材「『内的成長』社会へ」上田紀之（『現代文Ｂ』数研出版）と新聞記事

七　単元の具体的な評価規準

（1）　文章を読んで、構成、展開、要旨などを的確にとらえ、その論理性を評価しようとしている。

（2）　目的や課題に応じて、収集した様々な情報を分析、整理して資料を作成し、自分の考えを効果的に表現しようとしている。

八　指導観

（1）　単元観

主題に沿った壁新聞を作ったり、班ごとに解決策を考えることで、主体的・協同的に「中間社会の凋落」について考えることができる。

（2）　学習者観

学習態度は良好であり、積極的に発言する生徒も多い。発問は、簡単なものよりも、難しいものを用意し論理的思考力を駆使させる方が生徒の積極性が発揮される。グループ学習の場面でも、協力して行うことができる生徒が多い。

（3）　教材観

高校生ではあまり考えたことがないであろう「中間社会の凋落」について、自分たちが抱える問題としてとらえるきっかけとなり得る教材である。また、新聞記事を用いることで、自分に身近な問題であるという実感をもたせることができる。

九　単元の指導計画

次時間	学習活動	言語活動に関する指導上の留意点	◇評価規準 ◆評価方法
第1次 4時間	・本文の内容を読解する。 ・中間社会が凋落している現状を読み取るとともに、筆者の考える解決策やあるべき社会像を理解する。	・語句の意味や指示語について確認させる。 ・筆者が考える、中間社会の凋落の状況や、グローバリズム・ナショナリズム・原理主義の併存についてペアで検討して記述させる。 ・筆者の考える、あるべき社会像を理解させる。	◇（1） ◆記述の確認（予習プリント・ノート）
第2次 2時間	・実際の新聞記事を切り貼りした壁新聞を作ることにより、中間社会の凋落を、自分たちに身近なものとして実感する。	・4～5名を一つの班とし、中間社会の凋落に関する記事を集めさせ、一つにまとめさせる。 ・班で一つテーマを決めて新聞を作らせる。	◇（1） ◆記述の確認（切り抜きした新聞・ワークシート　1・2）
第3次 2時間	・班で一つの政党を作り、自分たちが	・新聞でまとめた問題点を解決できる政策を、班で話し合うことによ	◇（1）（2） ◆記述の確認

まとめた新聞にある問題点を解決する政策を考える。 ・演説会を行う。	って考えさせる。 ・自分たちの扱う問題点と政策がきちんと伝わるような演説内容を心がけさせる。	（ワークシート３・４・５） ◆行動の観察（演説の内容）

十　本時の目標

目的や課題に応じて、収集した様々な情報を分析、整理して資料を作成し、自分の考えを効果的に表現しようとしている。（「指導事項」のエ）。

十一　本時の評価規準

目的や課題に応じて、収集した様々な情報を分析、整理して資料を作成し、自分の考えを効果的に表現しようとしている。（「指導事項」のエ）。

十二　本時（全八時間中の八時間目）の指導

学習段階	学習内容	学習活動	言語活動における指導上の留意点
導入 ５分	・本時の学習内容を知る。	・進行役の生徒はワークシート４を配布し、説明する。	・説明に不足があれば補う。 ・壁新聞が「問題理解」に、演説が「問題理解」にあたることを理解させる。
展開 ４０分	・班（政党）ごとに演説を行う。 （１～８班）	・順番が来た班（政党）は、３分以内で演説する。 ・時間は計時係がカウントタイマーで示す。 ・新聞を示して問題点を明らかにした上で、政策（解決策）を発表する。	・発表が円滑に進行するように観察・補助する。 ◇本時の評価規準 ◆記述の確認（ワークシート４・壁新聞） ◆行動の確認（演説の内容）
		・各班１票を誰に投票するか協議する。 ・投票	・すべての発表が終了したら、班ごとに誰に投票するか協議する。 ・進行の指示で投票する。	・個人で記入したワークシート４　を持ち寄り、評価を班で検討した上で投票する班（政党）を決めさせる。
終結 ５分		・本時の学習内容を振り返る。	・配布された振り返りシートを用いて、本時までの取り組みを自己評価する。	・振り返りシートの質問項目について説明し、本時の学習内容を振り返らせる。振り返りの大切さに気づかせたい。 ◆記述の確認（振り返りシート）

十三　評価の観点とルーブリック

レベル	問題理解	問題解決
３	中間社会の凋落の例としてふさわしい複数の新聞記事を選び、共通する一つの問題点をあげることができる。	中間社会の凋落を解決するための、具体的・実際的な方策を示すことができる。
２	中間社会の凋落に関連する新聞記事を複数選ぶことができる。	具体的ではないものの、中間社会の凋落を解決するための方策を示すことができている。
１	中間社会の凋落に関連した新聞記事を一つは選ぶことができる。	感想にとどまっているものの、中間社会の凋落を解決するために考えることができている。